



▲防災対策庁舎の右側にもたれかかる残骸は役場第2庁舎。津波の最大波は非常階段の反対側から襲った。庁舎の背後にぎっしりと建ち並んでいた住宅や店舗は跡形もなく壊滅した。

1960（昭和35）年5月24日、南三陸町は高さ5.5mのチリ地震津波に襲われ、41人が犠牲になった。志津川地区の中心部にあった本庁舎が2.4m浸水した経験から、南三陸町では、役場庁舎の隣りに鉄骨3階建て高さ12mの防災対策庁舎を整備し、2階に監視モニターや非常通信設備、3階に自家発電設備などを設置し、災害に備えていた。

あの日、危機管理課の職員がここから防災無線で、高台避難を呼びかけ続けた。本震直後の津波警報は高さ6mの津波を予想していたが、15時14分、津波予想高は10mに変更された。この津波予想高を告げた後、防災担当職員始め、町長らも屋上へと避難する。その直後の15時25分頃、津波が襲来。15時33分には、建物よりはるかに高い、15.5mの津波が庁舎を飲み込んだ。

側壁がはぎ取られ変わり果てた建物が、津波の濁流から姿を現したのは2分ほど経ってからである。非常階段付近とアンテナポール付近に残っていたのはたった10人。「みんな、どこにいったんだ」さきまで屋上にいた人影はなかった。43人の地域住民と町役場職員たちが犠牲になった。